－所蔵作品紹介－

高橋　北修　TAKAHASHI Hokushu

池辺にて見し

いけべにてみし

作品データはこちら

高橋北修は明治31年、旭川生まれ。大正７年には、関兵衛らとヌタックカムシュッペ画会を結成し、旭川で初めての本格的な展覧会を開いた。大正８年頃、画家を志して上京、働きながら、日本画や洋画を学んだ。関東大震災の翌年まで北修の遍歴、修業時代が続いた。旭川に腰を据えた北修は、昭和６年、帝展入選を果たし、その後、道展、全道展の創立に参加するなど道画壇を中心に活躍した。昭和53年、79歳で死去、晩年の北修は右半身不随という病のなかで、新境地を開いた。

北修は昭和10年代まで帝展、文展に度々入選している。この時期の作品は郷土の風景に人物を配したものであった。大雪山や常磐公園など旭川の景勝を織り込みながら婦人や子供たちが憩う、長閑な情景を朴とつな調子で描き出している。

「池辺にて見し」（昭和11年）は帝展出品のために制作されたと思われる。池にかかる太鼓橋で憩う婦人を描いている。右側の鯉のいる池の描写に苦心したようで、日記の中で「鯉のあたりをいろいろと工夫したらようやくまとまって来た」と書いている。この年帝展には落選し北修は人物の表現や構図の勉強をやり直している。荒い筆づかいがリズミカルな調子をつくりだしており、若々しい力が感じられる作品である。

旭川美術館だより「氷華」No.22（1989.12発行）「収蔵作品から」より